

牧野富太郎博士（1862～1957）は、若き日、植物学の勉強心得を15箇条にまとめた。それらの中に「（現代語訳）植物園を有するを要す：自分の植物園を作りなさい。遠隔の地の珍しい植物も植えて観察しなさい。観賞植物も同様です」がある。博士にとっては、没するまでの30年間を過ごした練馬区東大泉の自宅の庭は「自分の植物園」に該当するであろう。その地は現在、区営牧野記念庭園として公開され、ミニ植物園的な空間を提供している。

ひるがえって、我が恩師における「自分の植物園」を思い起こす。本学のミツバチ研究の開拓・推進者であった岡田一次先生（1909～1999）には、ゼミ担任として、また農学部勤務中は学部長等の立場でご指導を受けた。先生のご自宅である玉川学園5丁目の「植物園」の特徴は蜜源植物が多いことで、ニホンミツバチが飼育されていた。この庭では、学内と同様に師弟同行の実験・観察が行われるとともに、先生からのご馳走攻めを受けた。

一方、学内で起居された本学創立者の小原國芳先生（1887～1977）にとっての

「自分の植物園」は、キャンパスそのものであった。先生は「夢の学校」の環境に不可欠な要素として‘植物のちから’を尊重された。オヤジ（畏敬と親愛を込めた先生への尊称）が召天される前月のある日、テレビで小原教育の真髓を語られた直後、オヤジからの呼び出し。雷亭（雷オヤジのゲストハウス）に何うと「僕は、この学園の庭を、さながら天国のようにしたいんだよ。子供たちに喜んでもらいたい。柿も枇杷も、もっと植えて頂戴。百日紅や山茶花も足りないな！僕に残された時間は短いんだ。小さい苗木を植えてもだめだぞ」とのご指示。そのときに先生が描いた「植物園」は、例えばニューヨーク植物園のような大総合植物園であったのか、それともより精神的な花苑であったのか、真意を訪ねる「新・植物園紀行」が、オヤジからの宿題である。

（いなづあつお／農学部教授・花き育種学）



花と虫と岡田先生（小野正人農学部教授提供）

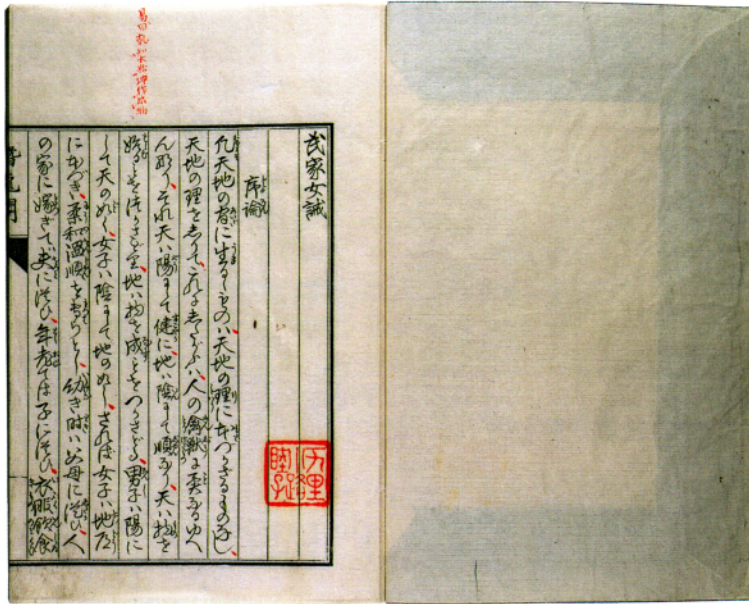


夢見る丘・玉川学園
（鈴木新一郎高学年教諭提供）

『武家女誠』

菅野和郎

SHŪ



徳川斉昭著 藤田東湖筆 和紙に墨書・袋綴装・26丁 27.8×19.0×0.6cm 安政2(1855)年以前写

この『武家女誠』の著者徳川^{ぶけによかい}斉昭^{とくがわなりあき}(1800～1860)は、攘夷の念篤く、また藩校弘道館の開設など文教にも熱心な、水戸藩第9代藩主である。本書は「序論」のほか、「忠孝の事」、「男女の別を正しうすべき事」、「奢侈を戒むへき事」、「儉約を勤むへき事」、「淫声異端を遠ざくべき事」、「嫉妬^{しつと}の心あるまじき事」、「胎教の事」、「婦徳の事」、「学文の事」、「貞節の事」の10章からなる。男女の立場、役割を峻別し、武士の妻として身を慎み、家を守り、子を養育し、夫や父母、主君に仕えるべきことなど、女性が守り心掛けるべき事柄を垂示した教訓書である。藩主の正妻や側室、奥向きに仕える女性に関する言及も多く、それらのための書とも見ることができる。また文中、仏教を外国由来として異端視し、排斥する点に斉昭の思想の一端が現れている。本文は比較的判読しやすい文字で記され、振り仮名や語義を多く付し、身近な喩えをまじえるなど、女性でも読み易くまとめられている。本資料は、斉昭の側室で水戸家第11代徳川昭武^{までのこうじちかこ}の実母、万里小路睦子の旧蔵書と推定される。巻末に睦子による識語があり、斉昭の著作を藤田東湖(1806～1855)に筆写させたものである旨が記される。また、用いられた罫紙の版心にある「潜龍閣」とは斉昭の号で、彼の用箋であると考えられるなど、斉昭の周辺にあった写本であることを十分にうかがわせる。『国書総目録』(岩波書店刊)では、『武家女誠』の項に「水戸の文籍による」とあるのみで、実在を確認していない。本書は、その貴重な一本であると考えられる。

(かんのかずお/教育博物館准教授)